# シルバー産業新聞（2009/6/10）

## プリズム

小規模作業所と企業のコラボが注目されている。いまは不況で仕事量の減っている小規模作業所だが、「働きたい」という欲求と、仕事の提供を通じて社会貢献をめざす企業の意向とがいい出会いをしている。札幌の特殊衣料（池田啓子社長）もそのひとつ。ドライクリーニングや事務所清掃を障害をもつ人たちを働き手に事業化、さらに小規模作業所での仕事や「社会福祉法人ともに」を設立して授産所を運営しながら、個性に応じて、働き場所や役割を分け合っている。そこで得られたヒントは、障害者や高齢者の福祉用具開発やレンタル事業に活かしている▼日本障害者リハビリテーション協会から、昨年8月に広島で開かれた研究大会「手と手を…ひろしまからの発信」の報告書が届いた。「社会資源の創造」という分科会で、小規模作業所などで作られた商品を販売する「僕らのアトリエ」代表、森浩昭さんがコーディネータを務めた。本職は料亭「久里川」の支配人だ。森さんの発言やパネラーの発言の要約に目がとまった▼「『お互いさま』をどう築くかです。福祉は『やってあげる』側と『やってもらう』側に分かれてしまう。しかし商売の世界では『ギブ・アンド・テイク』でなければ成り立ちません」。また、「すぐに人と比べがちですが、障害をもつ人は比べることはしない。自分の文化をもっているから、自分を大切にする。非常にインパクトある話でした」と。そして、「『社会資源の創造』という言葉をもう一度考えてみると、世の中にあることはすべてが社会資源です。ただ、それが実際に見えていないし、気づいていないだけなのではないでしょうか」と述べる▼最後に、森さんは、発言者の言葉を引いて、「障害者の人間らしい生活を基本に据えて考えなければ、本末転倒になる」と、自戒を込めて締めくくった。そこが、障害をもつ人の就労支援のポイントかも知れない。一元論的な発想ではなく、多様性や多文化を前提に、生産性のある仕事の在り方を作り上げていくことができれば、21世紀の新しい日本が生まれるかも知れない。障害者就労の伸展度合いは、そのものさしになるだろう。